

Title	式辞
Author(s)	高村, 仁一
Citation	静脩 (1984), 号外: 2-4
Issue Date	1984-04
URL	http://hdl.handle.net/2433/37823
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

供されるとともに、研究者のさまざまな情報要求にに応じていただき、図書館が真に京都大学の教育、研究を活性化するための重要な機関として、全学の期待に応じていただくことが、何よりも大切なことであると考えます。

幸い図書館では、新館の運営と機能の一新を最重要課題とし、他大学に例をみないような施策をまとめ、着々実施に移しておられますことは力強い限りでございます。伝統あるわが京都大学の学術研究の一層の進展のために、館員諸氏が意欲にみちた図書館づくりを目指していただくならば、図書館が益々その精彩を放つものと存じます。

今日、情報化時代と言われるように、学術情報量が飛躍的に増大する中で、大学図書館をとりまく環境は大きく変わっていると思います。情報資料の選択、収集、図書館利用のあり方など大学図書館に課せられている問題は、大学教育、研究の進展に深くかかわるだけでなく、今や国際的な広がりにおいても考えるべき問題をはらんでいると考えます。特に学術の国際交流が盛んになってまいりました昨今、この面での図書館の果たす役割も、

きわめて大きいものがあると言わなければなりません。

本学の図書館が、当面する諸問題に積極的に取り組まれ、よりよい図書館づくりを目指し、斬新な活動を展開していただくよう期待をいたします。私は全学的な理解によって、大学挙げて図書館活動の活性化することをバックアップする所存でございます。今、私は新装になりました本図書館の威容をまのあたりにしまして感無量のものがあります。

本日開館記念式にあたり、本図書館の建設に情熱を傾けられ、格別のご尽力を賜りました林前館長、また、ご定年をこの3月末日に迎えられます高村現館長は、ご就任以来、本当に日夜ご尽力を賜わり、本日の完成をみましたことに對し、また、今日の基礎を築かれた歴代館長はじめ図書館商議員並びに本館の建設をご支援くださいましたご列席の各位に深甚な謝意を表するものでございます。

本学附属図書館の益々の発展を祈念し、挨拶と感謝の言葉といたします。

式 辞

京都大学附属図書館長 高 村 仁 一



開館にあたりまして一言で挨拶申し上げます。

京都大学の長い間の夢の一つが、この美しい装いと豊かな機能をそなえた図書館として、ここに開館の運びとなりました。新館の実現までには、色々と曲折がございましたが、とくに本日ご来臨を賜りました皆様お一人お一人が、それぞれの

時代に図書館の将来について心を砕いて下さり、やがてそれが大きな潮流となって、ついに昭和56年度の施設整備事業として文部省の認めるところとなり、今日こうして、新しい図書館を皆様にご披露申し上げることができるようになりました。洵に感慨深いものがございます。とくに館長として3期9年間、附属図書館のためにご尽力下さった林良平前館長時代の商議会において、綿密な検討を加えられ、前田、岡本両総長時代をへて、沢田現総長時代に新営構想が策定され、2年の歳月と27億の巨費を投じて、昨年10月に竣工をみたものでございます。

新しい図書館像の確立にむけてご尽力を頂いた林前館長はじめ歴代館長・商議員の方々、さらにはこの新営構想を実行に移すことを決断された

沢田総長、そしてその実現にむけてご努力頂いた事務局長はじめ、経理部、施設部その他本部事務局の関係各位に対して改めて御礼申し上げますとともに、この大きな事業にご理解を示された文部省の関係各位に対して心から敬意を表する次第でございます。

また、新館の建築に際しては、各部局に大変お世話様になりました。図書館の事務部や閲覧室のことでは、法学部や理学部、書庫のことでは非常に多くの部局の暖いご援助を頂きました。皆気持よくご協力いただいたお蔭で、今日まで順調に計画が進みました。

卓越した設計と高度の施工で完成したこの美しい建物を、隅々まで綿密に気配り頂いた施設部から、昨年10月28日に引渡しをうけて以来5か月、開館準備に向けての附属図書館員の働らきには見事なものがございました。このようにして、いま、京都大学の新しいシンボルとしての図書館が皆様の前にあるわけでございます。

問題は、具体的な運営をどうするか、機能をどう充実させるかであります。まず何よりも大切なことは、図書館が利用し易く、自由な雰囲気の中を漂う思索の場となりますよう、利用面での制約をなるべく少なくしたいということでございます。利用者IDカードだけで、一旦館内に入ればどこへでも夜の9時まで、書庫にも自由に入って、拾い読みして頂けます。夜間でも貸出ができます。

新しい図書館の特徴の一つは、研究図書館としての機能の充実にあるかと思えます。お手許の附属図書館報「静脩」にも委しくありますように、まず高額参考図書の整備計画が挙げられます。Beilstein Handbook や Current Contents とか、Chemical Abstracts の Collective Index や国連・国際機関・主要国統計などのような大型の二次資料をはじめとする高額参考図書は、部局単位での維持が困難となりつつありますので、全学的な合意のもとで予算措置を講じて頂き、1階の参考図書室に配置されます。

また1階の雑誌閲覧室には、工学部の全面的な協力のもとに、工学部化学6教室の予算で購入される化学系和洋雑誌151タイトル及び工学部共通

図書室の外国雑誌107タイトル、計258タイトルのジャーナルが、新着雑誌を中心として配架され、全学の共同利用に供されます。

さらに、地下2階には40万冊を収容しうる学術誌のバックナンバー・センターを設置いたしました。今後各部局の希望に応じ、ここにバックナンバーを集中的に収容いたします。本学には約26,000タイトルの学術雑誌の長年にわたる蓄積があり、質量ともに国内屈指のコレクションとして、学内の利用はもちろん、全国的規模でも、大きな貢献を果すものと期待しております。

一方、一昨年設置いたしましたテレックスによる研究情報の国際交流は増加の一途を辿り、今後は校費以外での利用もはかられますので、研究情報の国際交流に大きな役割を果たすことが期待されます。図書館には、また、分野を越えた専門の交流の場となりますよう、教官談話室や共同研究室もでございます。また、今までと違って、名誉教授はもちろん定年退官された教職員にもIDカードを用意し、本の貸出もできます。このことにより、図書館が先輩と現役との学問の交流の場ともなりますよう願っております。

4月の開館と同時に、閲覧・貸出し業務は電算化されますが、受入・目録および雑誌処理、検索を含むトータル・システムについては、昭和59年度の予算の内示を文部省から頂いておりますので、明年初頭からは全面稼働し、いよいよ、学内はもとより、地域センター館として、また全国的な学術情報システムにもつながってまいります。

新しい図書館ができて、訪れる学内の方は、京大にもこんな立派なところがあるのかと、感心されます。それが、機能的な中味ではなくて、机や椅子や什器類をごらんになっての印象なのが、一寸残念ではございますが、しかし立派な什器類は図書館の雰囲気をつくるのに非常に大切だと思っております。事務部門はなるべく押えて、皆さんが利用される部分は、妨げのない、静かな、読書と思索の場にふさわしい雰囲気をもつよう、木製品を中心に心安まる環境づくりに館員が気を配りました。各業者の方々も京大図書館に納めるのならばと、損得ぬきで大勉強して下さいました。

ありがたいことです。いまから少なくとも半世紀、その風雪に耐えて、先人の手垢がしみ、重厚味を加えるであろうこれらの机が、そのまま京大の歴史を刻み、学風を語り伝えるものとなることを希っております。

私どもは、京都大学の図書館を、大学における教育・研究活動に対する〈支援機構〉であると、自ら明確に規定しております。新しい図書館の開館を迎えて、教職員の方々は申すに及ばず、未来を背負う学生諸君にも、この図書館を十分に活用して頂き、伝統を誇る京都大学のアカデミズムが一層の輝きを増すのに役立ちますよう、積極的な役割を果たすべく図書館は努力してまいり所存でございます。

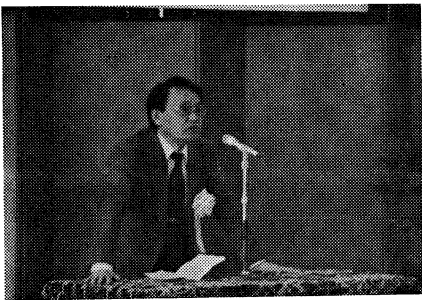
本日ささやかな記念品としてお手許にさしあげた図書館行事表には、Academic Year に従い新学期の4月から休館日や夜間開館休止日が記され

ておりますが、ここに紹介されている絵詞は本館が所蔵する3万冊の貴重書の中から選んだお国歌舞伎の物語でございます。めったにお目にかかれぬ古典にふれる楽しみも味って頂き度く、みんなで工夫してみました。

終りに、学外からご多忙の中を遠路この開館式にご臨席賜りました文部省学術国際局の広田課長、管理局の福田課長、全国国立大学図書館協議会長の裏田東大館長、各大学図書館長はじめご来賓の方々に厚く御礼申し上げますとともに、歴代総長はじめ学内にあってこの図書館の新営と整備に心を砕いて頂いたご列席の皆様お一人一人に改めて深甚の謝意を表します。今後とも図書館の活動に対して、深いご理解と暖かいご支援を賜わりますようお願いして、ご挨拶といたします。ありがとうございました。

祝 辞

文部省学術国際局情報図書館課長 廣 田 史 郎



本日の京都大学附属図書館新館開館記念式典には、大崎学術国際局長がご祝詞を申し上げるはずのところ、あいにく国会開会中で残念ながら出席できませんので、私から代って祝辞を申し述べさせていただきます。

京都大学関係者の方々に永く待ち望まれていた、新しい附属図書館が、昨年10月に建物の竣工をみて、いよいよこの4月から開館の運びとなりますことは、まことにおめでたく心からお慶び申し上げます次第でございます。

大学の教育あるいは研究の基本施設としての附属図書館の重要性につきましては、ここで改めて申し上げる必要もないかと存じますが、大学図書館は当該大学のシンボルあるいは心臓であると言われておるものでございます。京都大学の図書館はたいへん環境にもマッチしたすばらしい建物でございます。この施設は総面積にいたしまして従来の約3倍の14,000㎡、蔵書の収納能力は110万冊から120万冊と、これまでの約2倍を数えるなど、機能が著しく拡大されているわけでございます。それをベースにいたしまして、高度で、かつ使いやすい種々の施設・設備を備えているときいております。

京都大学は、これまで社会の各方面にすぐれた人材を数多く輩出していますとともに、世界的にも幾多の輝かしい研究業績をあげられて、学術研究の発展に寄与されているところでございますが、まさに京都大学にふさわしい新しいシンボルがこのたび完成したのだと思います。